

「障害」のマスメディア情報に対する 障害当事者の意識性

— 感動ポルノに着目して —

川 野 美沙季 石 川 須美子 遠 矢 浩 一*¹

【要 旨】

本研究は、障害当事者を対象にインタビュー調査を実施し、障害のマスメディア情報に関する当事者意識の検証を目的とした。その結果、感動ポルノ的な発信は障害当事者の実態には即していないものの、障害理解の窓口としての役割をもつことを明らかにした。すなわち、当事者が望む障害理解は、多様な背景をもつ個人として認められることであり、専門家やマスメディアは正しい情報発信の基盤を築く役割であることを示唆している。

【キーワード】

障害理解 マスメディア 感動ポルノ 障害当事者 社会モデル

I. 問題

わが国では、2014年の障害者権利条約の批准により、障害の「社会モデル」²に基づいた社会設計が進められている。従前の「個人モデル」では障害を個人の属性として捉えていたが、「社会モデル」では、障害を個人の属性として捉えるのではなく、社会的障壁として捉え、障害の解消に向けての取り組みの責任は、障害者個人の中ではなく社会の側に見出している。2024年4月には合理的配慮の提供が義務化され、障害特性に応じた具体的配慮を事業者が提供することとなり、共生社会の実現が前進していこう。こうした社会的な取り組みに加えて必要になるのが、社会に生きる人々の障害観の転換と思われる。栗田（2015）は、障害に対する潜在的・顕在的態度の研究をした自身の一連の研究から、現代社会においては共生社会の理念や、平等主義的な社会規範が強調されており、暗黙の了解として、障害者に対する肯定的なふるまいが要求されていることを報告している。すなわち、個人のうちにある障害者への態度が社会的な規範によって規定されていることを示す。一方、当事者を対象にしたアンケート調査では、障害者への偏見の態度は未だ残っており（内閣府世論調査、2023）、実際、障害者のグループホーム立ち上げに際して近隣の住民からの反対意見が出るなど（全国手をつなぐ育成会連合会、2020）、共生社会

1 *九州大学大学院人間環境学研究院

2 本研究における障害とは、障害の原因を人ではなく社会の側に求める「社会モデル」に基づき理解するため、「障害」表記に統一する。

の実現には課題が多いのが実情である。

さらに近年では「感動ポルノ」の問題性が議論されている。「感動ポルノ」とは、障害者の姿を描く報道で、障害者が、「障害」という苦勞があってもそれに耐えて負けずに頑張る・苦勞を乗り越えるといった描かれ方をすることを指す。この議論は、2012年に障害者の人権アクティビストである Stella, Young (2012) が、TED (Technology Entertainment Design) におけるスピーチで「Inspiration Porn」という言葉を用いて問題提起したことに始まった。ポルノとは、本来は性的な興奮を起こさせるもののことを指すが、Young (2012) はポルノを「意図をもった感動場面で感情を煽る」ことと位置づけた。そして、感動ポルノでは、障害があってもそれに耐えて・負けずに頑張る姿がクローズアップされがちであり、障害を負った経緯やその負担、障害者本人の思いを軽視し、「清く正しい障害者」が懸命に何かを達成しようとする場面をメディアで取り上げることが問題であるとした。この議論をきっかけに日本でも「感動ポルノ」は新聞やテレビなどの様々な媒体での障害者表象の問題として議論されるようになった。2016年にはNHKの障害者番組であるバリバラにおいて、感動ポルノについての特集が放送され、番組出演者でもある当事者が様々な立場から感動ポルノについて議論を交わしている (NHK バリバラ, 2016)。バリバラは「検証! 『障害者×感動』の方程式」として感動ポルノを取り上げ、同日に裏番組で進行していた、日本テレビの24時間テレビによる当事者の描き方を批判した。バリバラの番組内では、制作者側の意図に即した形で当事者本人の言葉が取捨選択され、ストーリーが作り出されていく過程が映し出された。その映像を見た出演者からは、映像が操作的に感動する内容になっていることへの疑問の声が多く挙げられていた。また、番組内で障害者の感動的な番組についての意見を聞いたところ、障害当事者の約9割が否定的に捉えていたというデータが紹介された。このバリバラの感動ポルノの放送は障害当事者たちも高い関心を持っていたようである。作家やタレントとして活動しており、障害当事者でもある乙武洋匡氏や、車いす芸人のホーキング青山氏等が意見を述べたほか、Webメディア上で活動している当事者や、SNS上などで当事者たちから賛否両論様々な意見が述べられた。乙武洋匡氏は、マスメディアが感動ポルノの描き方をすることで、チャリティー番組が多額の寄付金を集めることができている、災害復興や福祉施設への寄付ができているという現状については肯定的に感じつつも (乙武, 2019)、自身も「感動ポルノに苦しめられてきた1人である」とし、幼少期に自分にとっては当たり前の日常の動作が周囲の人々から過剰に評価されることに違和感を抱いた (乙武, 2017) と言う。車いす芸人として様々なメディアに出演しているホーキング青山氏 (2017) は、テレビ番組で障害者を取り上げる以上、ある程度、障害者を聖人君主として描くことは仕方がないとしつつも、聖人君主のような人ももちろんいるが、そのような人以外にも「いろんな人がいる」ということを紹介しないことに対して違和感を覚えるようである。一方で、感動ポルノという言葉がもつ、「障害者が自動的に感動の対象にされている」という点については疑問を抱くとし、「主導的に」感動の対象になろうとしている人の存在や、啓蒙のために自ら感動ポルノの対象になっている人の存在など、感動ポルノを迎合している当事者は必ず一定数いるとして、それ自体を責めることはできないとしている。このように、感動ポルノについて当事者自身が様々な解釈し、その問題性や有用性について、自身の経験や考えに結びつけて多様な思いを抱いているようであった。しかし、比較的近年の話題である「感動ポルノ」について、当事者からの語りを詳細に検討した研究は見つからない。比較的近年の障害者表象の問題である感動ポルノを扱うことは、人々の障害理解の在り方の分析や、格差是正のための議論の発展につながるなどの可能性がある。

「感動ポルノ」について障害学の立場から好井 (2022) は、「感動ポルノ」は、“生硬でぎくしゃくしたし印象を持ち、まだ成熟した意味が込められていない生乾きの概念”としながらも“私た

ち自身に障害者に対する偏った見方や差別があるということを印象深く指摘してくれる”としている。本研究では好井（2022）に倣い、「感動ポルノ」は、本来多様であるはずの当事者を、マスメディアが視聴者の感動や興奮を掻き立てるための存在として扱い、過剰な表現を与えることが問題の本質と捉える。本研究では、当事者に感動ポルノへの意識を調査することにより、近年の障害者表象が当事者にどのように受け止められており、社会の障害理解に影響を与えているのかについて、当事者の視点より考察を行う。

加えて、近年では障害の当事者自身がテレビやCMに出演が増加しており、中には当事者のエンターテインメント性を打ち出そうとする番組が登場しているなど、様々な観点から障害者の情報発信が行われている。障害者にまつわる報道の在り方は多様になってきているが、こうした報道に対して、当事者たちはどのような関心や印象を抱いているのかについては、未だ明らかにされていない。出演する当事者たちによる特別視を脱却することを目的とした試みが、当事者にどのように受け止められているのか今後検討していくことが、マスメディアにおける障害者表象の議論の発展には有用である。

II. 目的

我が国におけるマスメディアの信頼度は他国よりも高く（稲増・三浦，2017）非当事者の障害理解に影響を与える要因として、マスメディアが挙げられている（徳田・水野，2005）ことから、マスメディアの報道が、非当事者の障害を知る機会であることも窺える。そのため、マスメディアによる感動ポルノの演出も、視聴者にとって信頼性の高いものとして受け入れられ、視聴者たちの障害者への態度や行動を決定づける一因となることもあるのではないと思われる。しかしマスメディアの報道が非当事者の障害理解に影響を与えているか否かについて明らかにされた研究は多くは見受けられない。近年では障害者の情報発信の在り方も多様になってきているため、こうした報道の影響について当事者・非当事者の双方への影響を議論していくことが必要だと思われる。そこで、本研究では、マスメディアにおける障害者表象の問題性を、当事者の視点から理解することを目的に、当事者にとっての感動ポルノの意味と近年の障害者表象への意識を明らかにする。加えて、当事者の今後の障害者表象への思いを明らかにすることを目的とする。

なお、本研究においては「マスメディアでの障害の情報発信」は、障害に関するニュース、番組、ドラマ、CM等のマスメディア情報全般とし「感動ポルノ的な情報発信」においては、当事者の苦労を強調したドラマ、ドキュメンタリー、CM等のマスメディア情報と操作的に定義した。

III. 調査方法

1. 調査協力者：X機関にて運動機能のリハビリテーションを目的とする脳性まひ当事者4名に協力を依頼した。協力者のプロフィールは下記のとおりである（表1）。なお、協力者の特徴と

表1. 調査協力者のプロフィール

協力者	年齢	性別	診断名	当事者の出演するマスメディア視聴の頻度	マスメディアに取材された経験
A	45	男	小児脳性まひ	定期的に見る（1週間に2時間ほど）	新聞・テレビ
B	34	女	脳性まひ	積極的には見ない	新聞
C	44	男	脳性まひ	気になるテーマは見る	なし
D	45	男	脳性まひ	気になるテーマは見る	新聞・テレビ

して、4名中3名は、障害に関する講義やマスメディアへの出演経験があり、自身の障害について発信を行った経験のある者であった。協力者のマスメディア視聴の経験、マスメディアでの発信経験も語りに影響することを考慮し、インタビュー調査を実施した。

2. データの収集方法：調査は2019年12月に1人につき、60分～90分程度のインタビューを行った。半構造化面接法を採用し、事前に作成したインタビューガイドを基に適宜質問を付け加えながら尋ねた。なお、研究者は中立的な立場で調査を実施するために、感動ポルノという言葉は使わず、“感動を煽るような番組”などと言い換えて、感動ポルノへの意識を尋ねた。インタビュー内容は協力者の同意を得てICレコーダーで記録した。インタビューガイドは表2に示す。

表2. インタビューガイド

1 調査の導入	「今日は〇〇さんに、マスメディアで当事者の方がいろいろなか形で取り扱われているということについてどんな気持ちを抱かれていますかということについて、いろいろとお聞かせいただけたらと思います。」
2 基本情報の収集	性別・年齢・診断名・障害を扱うマスメディアに触れる頻度・視聴する内容・調査協力者自身がマスメディアに取材された経験を尋ねた。
3 当事者を取り上げるマスメディア情報への全般的な印象	
4 感動ポルノ的な情報発信への印象、自身の生活への影響	*協力者の返答や語りたいた内容に合わせて、質問の順番を入れ替えたり、個別に質問を付け加えた。
5 現代社会の障害理解の実感	
6 マスメディアを通じた障害理解の実感	
7 本調査を通して感じたこと・言い残したこと	

3. 倫理的配慮：協力者に本研究の目的を詳細に伝えた上で、個人情報保護されること、研究目的以外でデータは使用されないこと、研究参加の中断はいつでも可能であり、中断によって不利益を被ることはないことを伝えた上で、紙面での同意を得た。なお、本研究は、九州大学大学院人間環境学府研究倫理委員会の承認を経て実施した。

4. 分析方法：本研究では、混沌とした口述データに対して恣意的な解釈や分類を行わず、データそのものを忠実に構造化することを目指すKJ法(川喜多, 1970)を参考に、以下の手順に従って分析を行った。なおこの分析は、筆者の恣意的な判断を避けるために、臨床心理学を専攻する大学院生2名と共同で行った。最終的に、臨床経験が豊富な臨床心理士・公認心理師1名によって分析内容の確認が行われた。

具体的な分析の手順として、まず1名ずつインタビュー内容を逐語録にまとめ、意味のまとまりごとに内容を区切り、見出しをつける作業を行った。次に、内容が似ている語りを整理し、見出しをつけ小カテゴリーを作成した。最終的にそれらをより包括した大カテゴリーへと集約した。この過程では、語りの意味や本質からそれないよう、繰り返しオリジナルの文脈に照らし合わせて参照する作業を行った。以下、大カテゴリーを〈〉小カテゴリーを〔〕と示した。

IV. 結果と考察

分析の結果、語りの内容から6つの領域が抽出された。本稿においては、研究の目的と照らし合わせて領域1. マスメディアでの障害の情報発信に関する印象、領域2. 感動ポルノ的な情報発信への印象、領域3. マスメディアでの障害の情報発信への思い、領域4. 当事者にとってのマスメディア情報の位置づけについて、領域ごとの結果及び、語りの特徴について記述する。なお、具体例に関しては、語りの本質を損なわない程度に改変をした。()内は、同じ内容に言及した協力者の人数を示す。

1. 領域1：近年のマスメディアでの障害の情報発信に関する印象

領域1では、協力者の語った近年のマスメディアでの障害の情報発信に関する全般的な印象を整理した。2つの大カテゴリー、5つの小カテゴリーが抽出された(表3)。

表3. 近年のマスメディアでの障害の情報発信に関する印象

大カテゴリー	小カテゴリー	語りの具体例
	多様な取り上げ方(3)	・ひと昔前に比べると、いろんな取り上げられ方が増えてきた。
情報の変化(4)	感動ポルノ的な情報発信の減少(2)	・障害にも負けず頑張っていますというのはちょっと減ってきたのかな
	「障害=不幸」ではない描き方(1)	・障害を持っていることが不幸ではないという前提で発信している
情報の偏り(4)	「障害=頑張っている」という描き方(3)	・頑張っている様子を取り上げられるっていうのは依然強い
	情報の不足(3)	・メディアとかニュースに取り上げられる内容って本当に一部分

本領域では、〈情報の変化〉〈情報の偏り〉の2つの大カテゴリーが抽出された。〈情報の変化〉に関しては、全協力者が言及した。協力者は障害者がテレビ番組やCMなどに出演するようになった印象を持っており、それらが「結構いろんな取り上げられ方」「画一的ではない描き方」であると表現された。近年、法や障害の考え方の枠組みが変わったことで、障害者・健常者の報道を区別しない流れがある(三島, 2011)。当事者たちも、マスメディアの視聴を通して報道の在り方の変化を実感していることが窺えた。また、マスメディアでの報道内容に関して、「障害に負けずに頑張っているという描き方が変わってきた」「障害者の汚い部分(お漏らしやよだれ)も描くようになってきた」など、当事者の実態に即した内容への変化を感じているようである。これらの内容に関して「やっと変わってきた」「一昔前に比べると変わってきた」という表現で語られることが多かった。

一方、〈情報の偏り〉に関しても全協力者が言及した。3名の協力者より、「物語性のあるものが取り上げられるのは依然強い」「頑張っている人が取り上げられる傾向にはある」といった内容が語られ、依然として感動ポルノ的な障害者表象がある印象を抱いていることが推察された。また、「テレビで取り上げられる内容はその一部分」「表面的に分かりやすいところしか報道されない」「わかりやすいデータ以外にも出してくれればいいのに」という語りが得られたことから、現状では障害者の実態を知るには情報が不足しているという思いを抱いていることが窺えた。

領域1においては当事者たちは、マスメディアの視聴を通して報道の在り方の変化を実感していることが窺えた。しかし、こうした変化の実感と同時に、〈情報の偏り〉という印象も語られた。感動ポルノ的な、障害を美化した描き方が依然として存在していることや、一部の分かりや

すいデータしか提示されていないことに対する情報の不足を感じていることが窺えた。近年、障害者の意向を尊重しようとする番組も見られてはいるが、一部の番組による取り組みであるため、当事者たちが変化を実感しにくい可能性も考えられた。

2. 領域2：感動ポルノ的な情報発信への印象

領域2では、協力者の語った感動ポルノ的な情報発信への印象や思いを整理した。3つの大カテゴリー、14の小カテゴリーが抽出された（表4）。

表4. 感動ポルノ的な情報発信への印象

大カテゴリー	小カテゴリー	語りの具体例
当事者としての個人的な思い(4)	実態が報じられないことへの違和感(4)	・ 障害者から見るとちょっと違うよなと感じながら見るというのはあります。
	実態が報じられないことへのネガティブな思い(2)	・ 障害があっても…というのが前に来るので、そういう捉え方しかできないんだなって
	中立的な意見(3)	・ 嫌とか否定も肯定もなくて（感動ポルノ的な情報発信が）あるなあってくらいで見ている
	共感する立場(2)	・ 中学の時とかは（出演する当事者に）共感できる部分も感じていた
社会的な意義(3)	情報から距離をとる(2)	・ もう今は情報としては僕には要らないな、と
	非当事者の障害理解への有用性(2)	・ あれ（感動ポルノ的な情報発信）で関心をもってくれるなら、関心をもってくれたらいい。
	非当事者の有能感への有用性(1)	・ （番組を）見る側や作る側なりの肯定感が必要なかなって。感謝されたり、感動したとか。
	番組の構成上の必要性(2)	・ がっつり障害者番組とかやったら絶対見ないですもんね。だからああいう報道になるのかなって ・ 番組としては視聴率も上げないと
出演する当事者への思い(2)	出演する当事者にとっての有用性(2)	・ 感動ポルノみたいな描き方で注目してもらいたい人は、注目してもらえればいい。 ・ （当事者にとって）目指す姿とかが作られやすかったりするのかな。前例を作っていくっていう面では（感動ポルノ的な描き方も）重要だとは思う。
	当事者の生活改善への有用性(1)	・ （番組で）車いすとかが取り上げられることでその商品が使えるようになることがある
	肯定的な捉え(1)	・ （テレビに出ている当事者は）表現する機会を得ることができている、チャレンジした結果だ
	否定的な捉え(1)	・ マスコミに取り上げられると、頭文字がついていく…でもその時点で面白くなる
出演する当事者への思い(2)	シンボルとして扱われていることへの危惧(1)	・ （テレビに出ている当事者が）賢いしお金を持っているから出来るんだとなると良くない
	番組構成の配慮の期待(1)	・ 周りの芸人さんとかが特別ではないから笑っても良いんだよとか言ってくれたらいいのになと思う

本領域では、〈当事者としての個人的な思い〉〈社会的な意義〉〈出演する当事者への思い〉の3つの大カテゴリーが抽出された。〈当事者としての個人的な思い〉では、[実態が報じられないことへの違和感]に全協力者が言及した。協力者たちは、番組で描かれる当事者の姿をみると「それはちょっと違うよな」「できていることをしているだけなのに」といった感情が起ると語り、当事者の実態との乖離に違和感を覚えるようであった。NHK バリバラが感動ポルノの問題を取り扱った際にも、9割程度の当事者が感動を煽るように描く番組について否定的な意見を述べていた（NHK バリバラ, 2016）。このことから、当事者の多くが、感動を煽るように描く番組で報じられる内容は、障害当事者の実態を必ずしも映し出したものではなく、違和感があると捉えている可能性が示された。その一方で、[中立的な意見]は3名の協力者が言及した。協力者たちは全員感動ポルノへの違和感を述べながらも、「番組については否定も肯定もしない」「番組自体は、それはそれでいいんじゃないかな」「あれで注目してもらいたい人は注目してもらえばいい」となど感動ポルノのポジティブな側面についても言及した。

また、〈社会的意義〉にも全協力者が言及していた。協力者たちは、「障害を知るツールとしてはいいのかな」「無関心よりははずっといい」と語り、[非当事者の障害理解への有用性]を感じているようであった。さらに、感動ポルノ的な発信に出演する当事者・視聴する非当事者の自己肯

定感への言及があった。「見る側作る側なりの肯定感が必要」と語られ、非当事者である視聴者や番組の作り手が、障害者のサポートをすることで、自身の満足感や効力感を得ることができるという言及であった。また、〔当事者にとっての生活改善への有用性〕においては、出演することで当事者自身に将来のモデル像や環境面の配慮の前例が出来るという、視聴する当事者にとってのポジティブな側面への言及があった。

〈出演する当事者への思い〉に関しては2名の協力者からポジティブ・ネガティブ両面の語りが得られた。ポジティブな捉えをしている当事者は、当事者には自己実現の機会が少ないという現状の中、マスメディアでの出演は自己実現の機会を自分で獲得し、表現に挑戦した結果であると評価した。ネガティブな捉えをした協力者は出演する当事者には本来持っている魅力があるが、“障害者”という頭文字がついて報じられることに違和感を覚えるとした。この協力者からは、〈番組の構成の配慮の期待〉についても言及があり、周囲のタレントが、出演する当事者が本来持っている魅力を引き出す関わりをすることへの希望が語られた。

領域2においては、感動ポルノ的な情報発信において、当事者は、より客観的な立場で、番組や、非当事者、自分以外の当事者への影響について多角的に捉えようとしていることが窺えた。これらのことから、当事者はマスメディアで実態が報じられないことに違和感をもちつつも、感動ポルノにより社会が障害に対して興味をもつきっかけになるという社会的意義を見出し、中立的な立場に至る可能性が考えられた。

3. 領域3：マスメディアでの障害の情報発信に対する思い

マスメディアでの障害者の情報の取り扱いによる、社会への障害理解への普及についての思いを整理した。これらは、2つの大カテゴリ-6の小カテゴリが抽出された（表5）。

表5. マスメディアでの障害の情報発信に対する思い

大カテゴリ	小カテゴリ	語りの具体例
障害理解が広がらないことへの不安(4)	情報の偏りにより障害者の実態が伝わらない(3)	・きれいなところとか分かりやすいところとか、限られた部分だけを限られた文字数で伝えようとしてもなかなか伝わらない
	情報が減少することへの危機感(3)	・(2020年の東京オリンピック・パラリンピック終了後)に障害者の情報が減っていき、受け入れとも逆行していくのかな
障害理解が広がることへの期待(3)	「障害者」と「健常者」の共生(2)	・このまま障害者と一般の人が生活しているっていうのが日常的になればいいのかな
	特別視の脱却(1)	・義足をつけていない状態でもTVとかでみると…なじむなあ
	障害者像の多様化(1)	・いろんな人をいろんな形で取り上げる機会があれば、…障害者って(報道の)ケースが少ないので、障害者はこんなもんだって(イメージが固定化されやすい)
	障害に関する制度や情報の発信(1)	・マスメディアでもっとヘルプマークやデフリンピックを取り上げてほしい

本領域では、〈障害理解が広がらないことへの不安〉〈障害理解が広がることへの期待〉の2つの大カテゴリが抽出された。まず、全協力者が〈障害理解が広がらないことへの不安〉に言及した。協力者達は、「一部のわかりやすい情報だけではなかなか(障害者の実態は)伝わらない」と、障害者に関する情報が不足していたり、正確性に欠けていたりすることを語り、障害者の実態の理解にはつながっていないと実感しているようであった。さらに、3名の協力者が〔情報が減少することへの危機感〕に言及した。協力者たちは、2020年の東京パラリンピックが終了することで、障害者の情報が減少することの危惧を語り、社会の障害の理解も変化していくのではないかと感じているようだった。山崎・石井(2019)の調査でも、パラリンピック開催前には新聞記事が大幅に増加するが、開催年の翌年には大幅に減少していることが分かっており、障害者に

関する報道量は社会情勢によって変化しているようである。パラリンピック以外にも障害者にまつわる事件が起こった際は、連日報道が続くこともある。今回の調査では、協力者全員が障害者の報道が、社会の障害理解に影響を及ぼすことを語っていた。そのため、パラリンピックという、障害者アスリートが注目される機会が、終了後に減少していくのかという動向が気になると同時に、社会の障害理解が進んでいくのかということについて危機感を覚えているようであった。

一方で、マスメディアを通して〈障害理解が広がることへの期待〉にも言及があった。小カテゴリーでは、個人で多様な期待が語られ、協力者の語りからは、障害者に対する情報が広がっていくことで、「障害者」という区別がなくなること、そして当事者が多様な背景をもつ一人であることを社会が理解することを求めていることが分かった。今回の協力者たちの意見の特徴としては、こうした障害にまつわる情報がマスメディアを通して発信されることへの期待を語ったことである。今回調査に協力した当事者のうち、3名は講演会・取材などで自身の障害に関することを発信したり、障害理解を広げるための活動をしていたりする者であった。障害理解を社会全体に広げていきたいという思いが、マスメディアへの障害の報道に対する意識性にもつながったのではないと思われる。

領域3においては、影響力の大きいマスメディアが障害に関する多様な情報を取り扱うことへの希望が語られた。マスメディアがより多様な障害者を取り上げていくことで、当事者たちが「障害者」というステレオタイプにとらわれずに、多様な背景をもつ一人として社会の中で当たり前前に認められ、生活していくことを希望していることが推察された。

4. 領域4：当事者にとってのマスメディア情報の位置づけ

領域4では、協力者の語った、マスメディア情報の自身の生活における位置づけや利用時の留意点に対する言及を整理した。3つの大カテゴリー、6の小カテゴリーが抽出された（表6）。

表6. 当事者にとってのマスメディア情報の位置づけ

大カテゴリー	小カテゴリー	語りの具体例
有用な情報を得る機会(3)	新しい情報を得る(3)	・ドラマで新しい車いすの情報を知った ・自分の将来の選択肢を考えた
	自分以外の当事者の意見を知る(2)	・当事者が出ている番組を見て、この人はこんな意見なんだって
社会的な位置づけを確認する機会(2)	一般社会における障害者のとらえ方を知る(2)	・社会にはサポーター的な人ばかりがいるわけではない。そのことを知っておくのも自分が困らないためには必要
	意見の表明の仕方に気づく(2)	・（当事者の人のSNSの投稿内容が批判されているのを見て）それ以降レストランを予約するんだったら（自身が車いすであることを）言うようになりました。 ・当事者の意見や抗議内容が、報道された時に批判的なコメントを見ると）なんかあった時に訴えかける場所って選ばないといけないなって思う。
情報を有益に使うための工夫(2)	リテラシーをもつ(3)	・上手に情報を取捨選択することが大事 ・テレビで報道された出来事の詳細を知るために）ネットで記事を探するなど、足りない情報を積極的に補う
	情報との距離の取り方を模索する(1)	・マスメディアの情報を自身がどう受け取るかが「私にとっては余裕のパロメーター」

本領域では、〈有用な情報を得る機会〉〈社会的な位置づけを確認する機会〉〈情報を有益に使うための工夫〉の3つの大カテゴリーが抽出された。

〈有用な情報を得る機会〉には3名の協力者が言及した。〔新しい情報を得る〕〔自分以外の当事者を知る〕では、協力者たちは、テレビ番組などで車いすの情報を得ていることや、進路を決

定する際にテレビで報じられる障害者の姿を参考にしていることなどを語った。

また、こうした情報は障害者の〈社会的な位置づけ確認する機会〉として機能するようである。2名の協力者より、「社会にはサポートイブな人ばかりがいるわけではない、そのことを知っておくことが必要」といった内容の言及があった。当事者たちは、一般社会で生活する上で有益な情報としてマスメディア情報から積極的に非当事者の意見や立場を収集していることが窺えた。

〈情報を有益に使うための工夫〉には3名の協力者が言及した。協力者たちは、マスメディアの報道を上手に取捨選択し、足りない情報は補うなどの工夫をしていることを語り、〔リテラシーをもつ〕ことが大事であると強調した。〔情報との距離の取り方を模索する〕に言及した当事者は、「マスメディアの情報を自身がどう受け取るかが私にとっては余裕のバロメーターみたいなもん」と語った。これらの語りは、当事者がマスメディア情報に適切に対応しようとする行動と捉えることができるだろう。

領域4においては、当事者はマスメディア情報に対して、能動的にアクセスし、情報の中立性や妥当性を評価しながら、自身にとって価値ある情報として積極的に利用していることが示唆された。また、マスメディア情報の中には当事者にショックを与える情報も含まれる可能性が窺えた。望月（2017）においては、相模障害者連続殺傷事件の報道に対してショックを受ける当事者の存在が報告されている。今後、こうした障害者の報道に対して当事者が適切に情報を得ていけるようなサポートが必要だろう。

V. 総合考察

感動ポルノは、Young（2012）が指摘したように人々の個人モデル的な障害理解を助長する可能性のある発信と思われる。本調査に協力した当事者は感動ポルノ的な情報発信に違和感を覚えるが、社会への発信力という点において意義を感じていることが窺えた。「むしろ情報が減っていくことの方が心配」と語った当事者のように、マスメディアでの発信の影響に強い期待があることが考えられる。当事者は感動ポルノを窓口として、障害や当事者に興味をもってもらうことにこそ意義があり、そこから当事者の実態に即した学びを理解していくことを期待していると推察される。これは障害当事者自身が、マスメディアを逆手にとって、その利用を積極的に考えているともいえるだろう。当事者たちは、一般社会における障害や障害者の取り扱いに対してタフで熱心な思いをもつことが明らかになった。

野村（2020）は障害者役割の一つとして、「自己の社会的不利に対して忍耐強く打ち勝つこと」をあげている。本研究で明らかとなった、「感動ポルノ」に対してマスメディアを逆手に取る当事者のタフな意識についても、当事者である彼らが障害者役割に縛られた結果であるとも推察される。当事者らが、社会から求められる障害者役割に縛られることなく、多様な役割を持つ人間として生きていけるように支援することも必要であると考えられる。そのためにも、当事者が個人で社会的バリアを乗り越えようと努力するのではなく、支援者・専門家と当事者が一体となって、社会に働きかけることが必要である。障害に関する専門家が障害に関する情報を正しく扱い、マスメディア情報が正しく発信される基盤を作り上げていくことこそ、当事者にとって望ましくない感動ポルノ的な情報発信の抑制につながるだろうと思われる。

さらに、当事者の語りから、影響力を持つマスメディアで多様な障害者像を発信することへの期待が抽出され、近年の障害者の多様な描き方を、積極的に受け入れていることが窺えた。これらより、今後は、感動ポルノを抑制した当事者理解の在り方について議論し、その効果についても具体的に検証していくことが必要と思われる。障害者表象の変遷について、好井（2022）は、

哀れみや同情の存在としての描き方から、困難を克服した象徴としての描き方に変容し、近年ではその両者が中間くらいの福祉サービスの対象として描かれるようになったとまとめている。より具体的に言えば、近年では、新たな障害者表象について当事者自身が主体的に議論に参加し、番組内でも様々な描き方が模索されている(玉木, 2018)。このように、マスメディア-当事者-視聴者の3者間で障害者表象の在り方を議論していくことは、個人モデルによる一辺倒の障害理解の在り方を変容させ、多様な障害者表象を形成するきっかけになると考えられる。

一方で、マスメディア報道の当事者への影響性も考慮する必要がある。当事者の語りから、マスメディアでの障害報道による揺れ動きも確認された。今日では、広くSNSも普及しており、マスメディア情報の受け手による意見の中には、当事者を傷つける内容も含まれる。2012年の障害当事者向けの調査では、障害当事者のインターネット利用率が障害者全体で53%となっており、かなり高い割合でインターネットを利用していることが分かる(総務省情報通信政策研究所調査研究部, 2012)。また近年では、障害者に対してマスメディア資料の提供の幅を拡大しようとする動き(家瀬, 2017)も見られていることから、今後ますます障害者の情報格差は緩和されると思われる。マスメディアやインターネットの膨大な情報の中には、信頼性や妥当性が不明瞭な情報も多く含まれるため、正しくない情報は取捨し、正しい情報や自身にとって必要な情報を選択していくことは必要不可欠である。また、SNS等における一方的な誹謗中傷に対して、メディアリテラシーをもつことの重要性は既知の通りである。協力者の多くも情報の取捨選択行っていくことの重要性を強調した。今後は、当事者が必要とするメディアリテラシーについて教育を行っていくことや、専門家が、社会情勢を把握し、重大事件が発生した際に、当事者の心理的ケアを行う視点をもつことが有用と思われる。

VI. 本研究の意義と限界

本研究の特徴点は、障害理解に影響を与えるとするマスメディアに改めて着目し、比較的近年のマスメディアにおける障害者表象に対する障害当事者の意識性を検討したことといえる。これまで学術的には扱われてこなかった感動ポルノの問題を取り上げ、個人モデルによる障害者表象に対する当事者の思いを整理した。

本研究の限界を以下3つ挙げる。まず、はじめに対象者数の少なさが挙げられる。今回の調査は4名の協力者の語りを整理したが障害者全体に一般化することは困難であり、より多くの協力者の語りをもとに検討を行うことが必要である。次に、対象者の偏りが挙げられる。今回調査に協力した4名はすべて脳性麻痺の当事者であり、知的発達遅れのない身体障害当事者であった。また、自身の障害について講演会やマスメディアなどで発信した経験のあるものも含まれていた。このような対象者の偏りが今回の調査の結果に影響を及ぼしたことも考えられる。障害種や社会的立場が異なれば、マスメディアに対する意識の在り方や感動ポルノへの捉えは異なる可能性も考えられる。そのため、今後は幅広い障害種の協力者を対象として、より多様な意見を収集していくことが必要である。さらに、当事者がどのような情報からマスメディアへの意識性を抱いているのかという要因間のプロセスを十分に扱えなかった。これを明らかにしていくためには、プロセスを扱う分析方法や事例研究が不可欠である。

感動ポルノとは、非当事者の障害理解の問題である。今後は、非当事者への調査も行い、感動ポルノのような障害理解の在り方の実態の解明と、どういった情報を非当事者に伝えていくことが障害理解に有用であるかを明らかにしていくことが必要だろう。

・謝辞

本調査に協力していただいた4名の方へ感謝申し上げます。

・COI

本論文に開示すべきCOIはない。

引用文献

- ホーキング青山 (2017). 考える障害者. 新潮社.
- 稲増一憲・三浦麻子 (2018). マスメディアへの信頼の測定におけるワーディングの影響：大規模社会調査データとWeb調査実験を用いて. 社会心理学研究, 34 (1), 47-57.
- 川喜田二郎 (1970). 続・発想法 KJ法の展開と応用. 中央公論新社.
- 栗田季佳 (2015). 見えない偏見の科学 一心に潜む障害者への偏見を可視化する 一. 京都大学学術出版会.
- 三島卓穂 (2011). 発達障害者支援とマスメディア, 特集 (シンポジウム)・共生社会を創る, 発達障害研究, 33 (1), 45-46.
- 望月隆之 (2017). 知的障害者が相模原障害者殺傷事件について語ることの意義―「にじいろでGO!」における当事者活動の取り組みから―. 田園調布学園大学紀要, 12, 195-204.
- 内閣府世論調査 (2023). 『障害者に対する世論調査』
<https://survey.gov-online.go.jp/r04/r04-shougai/gairyaku.pdf> (2024年2月20日 最終閲覧)
- NHK Eテレ (2016). 『バリバラ～障害者情報バラエティー～』「検証!『障害者×感動』の方程式」2016/8/28放送.
- 野村一夫 (2020). 病者役割と障害者役割
https://www.socius.schule/2020/03/blog-post_363.html (2024年2月20日 最終閲覧)
- 乙武洋匡 (2018). 「障害者」という個人は存在しない, 乙武洋匡公式サイト OTOZONE, 2018年1月7日公開
<http://ototake.com/20180107.html> (2024年2月20日 最終閲覧)
- 乙武洋匡 (2019). 『24時間テレビ』は, 障害者に何をもたらしたのか.
[notehttps://note.mu/h_ototake/n/n8a2df3c7630a](https://note.mu/h_ototake/n/n8a2df3c7630a) (2024年2月20日 最終閲覧)
- 総務省情報通信政策研究所調査研究部 (2012). 障がいのある方々のインターネット等の利用に関する調査研究 [結果概要]
<https://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2012/disabilities2012.pdf>
(2024年2月20日 最終閲覧)
- Stella, Young (2012). I'm not your inspiration, thank you very much TEDxSydney
https://www.ted.com/talks/stella_young_i_m_not_your_inspiration_thank_you_very_much
(2024年2月20日 最終閲覧)
- 玉木幸則 (2018). 「障害者×感動」の方程式の嘘っぽさ―日常の等身大の障害者とのギップへの問題提起, 福祉労働, 161, 62-69.
- 徳田克己・水野智美 (編) (2005). 障害理解 一心のバリアフリーの理論と実践. 誠信書房.
- 山崎貴史・石井克 (2019). 障害者スポーツに関する新聞報道の変容：競技間格差に着目して, 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 134, 117-130.
- 家禰淳一 (2017). 障害者及びがん患者に対する情報格差緩和のための図書館サービス, 奈良大学紀要, 45, 43-54.
- 好井裕明 (2022). 「感動ポルノ」と向き合う 障害者像に潜む差別と排除. 岩波ブックレット No. 1058, 岩波書店.
- 全国手をつなぐ育成会連合会 (2022). グループホーム等障害者関連施設建設をめぐる反対運動に関するアンケート調査報告書
<http://zen-iku.jp/wp-content/uploads/2020/12/201211gh.pdf> (2024年2月20日 最終閲覧)